

日本彫刻の特質

文學士 中 川 忠 順

私のお話は唯今の御話のやうに修養的のことではありませぬで誠に純形式のお話を申上げるのであります。日本彫刻の特質と申しましても、凡ての日本の彫刻の古代作品に對して一々の上から其特質を述べやうとする譯ではございませぬ。日本の今日までの彫刻を見ますと、其生命のある所は即ち佛教彫刻でありまして、此佛教彫刻を中心として見るより外のものは遺つて居りませぬ。其故に佛教彫刻の行はれて居つた國々の彫刻と日本の佛教彫刻と如何なる差別があるかと云ふことを極く大體に互つてお話し申さうと思ふのであります。若しも餘裕がありましたならば次に近世の我が木彫界に對する一つの意見を加へて置かうと思ひます。

佛教藝術の行はれました國と申しますれば、申す迄もなく其本源地たる印度及其附近で、次には支那それから朝鮮、朝鮮を経て日本に佛教藝術が輸入せられた次第であります。印度に遺つて居る藝術品を見ますと石像が多い。ガンダラの彫刻といひ、其他各所に存在して居るもの、即ちカルカッタの博物館などに收容されてある所のものを見ると石像が多い。然らざればロックカットの形式で其中には稀にプロ

ンズのものゝ認めることが出来る。支那では今日では有名なる龍門と大同と、それから義州の大凌河の左岸にある石窟、此等は殆どロックカットの形式で出来て居ります。それから個人の祈願になつた小さい石像が澤山あります。又いろ／＼な銅像も、小さいのから稍、大きなものに至るまで澤山遺つて居ります。朝鮮では慶州が今日の佛教藝術の最も中心になつて居りまして、其處には石像の佛がある。又銅の佛がある。其石佛の中で最も有名なものは石窟庵と云つて居る。やはりロックカットを真似た所のものであります。それから日本に於きましては御承知の如く古くは奈良の法隆寺、京都の太秦の廣隆寺を初として其他の古刹には無量な佛像彫刻が遺つて居ります。

今之れを材料の上から別けて見ると何う云ふことになるかと申しますと、佛教彫刻に對する材料の種類に就いては法華經の方便品第二に其の事を説いてあります。それを見れば、凡ての金屬も佛像を造るに可である、木も宜しい、土も宜しい、或は布をつゞけて固めたものでも宜しいとある。外にいろ／＼ありますけれども、彫刻に關する方面に對しては斯ふ云ふことを述べて居ります。さうしますと、凡そ立體に使用し得る所の材料は何を以て佛を刻んでも差支ないといふ立場になつて居ります。之れを印度に遺存せる彫刻の上に當てゝ見ますといふと、印度に在つては石材が主になつて居ります。次はブロンズであります。それから木彫としては既に經文などにも説いてありまして幾分か香水で以て彫刻されたものはあるかも知れませぬけれども、遺存して居るもので充分其れを知るだけのものはありませぬ。そ

れから支那でも矢張り石材が主になつて居ります。次は銅です。此等は實物が現存して居りますから其れに就いて一々明かに知ることが出来ます。次には法華經に説いてあります如くに、布を張付けて造る即ち夾紵の像と云ふものがある。是れは記録に存して居るばかりで、今日では未だ支那に其實物が發見せられませぬ。但し支那も元より以後になりますと再び此制度が復活されて居りますけれども、それ以前時代のものに於ては今日迄遺存する所のものがない。記録に依つて證明する外はありません。第四は土であります。土も當然佛像を造ることを許してありますが、土で造つたものは元來北邨山あたりから發掘されたいろ／＼のものが澤山ありますけれども、まだ佛像の彫刻として立派に具はつたものを見ませぬ。是れも無いではありません。寧ろ四天王像に近いものがありますけれども併し誠に類が少い。但し是れも後に元以後になりました一遍復活するやうな時がありますけれども、主として古い時代について述べるであります。其次は檀像であります。檀像には白檀と赤梅檀と二種ありまして、それも現存して居つたことがあります。或は其中の或ものは我邦に向かつて輸入せられて居るかも知れませぬけれども、兎も角も遺存品は向ふには殆ど無いと言つて宜からうと思はれるのであります。

次に日本に戻つて見ますと、先程申した三國に普通であつた所の石材と云ふものは日本では非常に少く使用されて居ります。古來石像の存したことは記録にも見えて居りますし、又遺品でも稍、ロツクカッ卜式のものゝ遺つて居ないでもありませんけれども、他の遺存せる彫刻と較べて見ると餘程少いのであ

ります。一體日本では石像彫刻と云ふものは盛にならなかつたので、藤原時代までポツリ／＼存して居りましたが、鎌倉時代に至つて大に石材使用の途が開けて來ました。其第一の動機は宋朝の藝術を傳へた爲めであつて、陳和卿等が來て日本に石材彫刻を始めたのが一つの原因であつたらうと思ふ。御承知の如く陳和卿等に成つた石獅子が東大寺の南大門に遣つて居りまして、それまでは日本に石の獅子と云ふものは造られて居らなかつた。是れから後殆ど木像と石像と兩方の狛犬が造られるやうになりまして遂には石の狛犬が普通になつて來たのであります。支那のロックカット式のものは今笠置の山に遣つて居る石像と、それから大分縣邊りのもの、遠くでは達谷の窟屋のものは鎌倉以前のものであつて、矢張りロックカット式のものと思はれますけれども、さういふ遺方がまた鎌倉に來て復元されて居ります。以前ものは出來た年代も其人もすべて判明しませぬけれども、鎌倉のは分明に其時代が分かつて居ります。斯う云ふ風に古い形式が一方に於ては復元されて來て居ります。加之現存して居る石佛から見ると單獨に造られたものが鎌倉時代に於てはチョイ／＼遣つて居ります。やはり石材を使用する術が種々な方面から出て來て遂には本尊式のものにまでも其技術を應用して石材を使用するに至つたものと思ふ。獨り斯かる方面のみならず佛教藝術に關しては石材使用の途がもつ／＼廣くなつて參りました。それは鎌倉で最も普通に起りました十三重の塔であります。是れは以前にも造られたことは見えて居りますが、併し鎌倉ほど澤山に十三重の塔が造られたことはなからうと思ふ。御承知の如く其中の最も有名なる十

三重の塔は西大寺の興正菩薩が宇治の中島へ造つたものであります。近來再建されて立派に遺つて居ります。それから興正菩薩の弟子の輪昭と云ふ者が大阪の四天王寺の前へ大きな石の鳥居を造りました。

是れは其以前は全く木造であつたのを此時初めて石造にしたのでありまして、日本に於ける石造鳥居の第一は此大阪四天王寺の鳥居としなければなりません。それから私はまだ見ませぬけれども興津の井上侯爵の邸内には鎌倉時代の石橋が使用してあるさうであります。年號が確かに刻んであるさうであります。斯う云ふ風に鎌倉では非常に石材使用の途が佛教藝術でも餘程廣い範圍を以て起こつて居りますけれども、其結果は餘り盛でありませぬで、遂には六地藏的のものに變形して行くやうな次第であります。

次には日本の塑像でありますが、日本の塑像は奈良朝が無論其最絶頂でありまして、平安朝に於ては餘り行はれませぬ。其以後殆ど絶滅したかの姿であります。勿論鎌倉時代のものが無いではありませんけれども、到底一つの彫刻物として稱するに足るものは遺つて居りませぬ。

次には金屬類であります。金屬類の中でも純金を使用したことは寺の古い財産目録の中には明かに遺つて居りますが、其も、の貴重なる所以でありますが、後世まで同じ形を傳へては居りませぬ。多くは潰されて形を變へたものと思ひます。

次には銀であります。是れは一度に餘程澤山の佛を造つた例がありますけれども、矢張り其貴重金屬たるが爲めか今日は殆ど潰されてしまつて遺つて居りませぬ。唯、遺つて居るのは東大寺の三月堂の不空

絹索觀音の前立に一つ遣つて居ります。それから江州に一體小さいのが遣つて居るだけであります。

其次は銅であります。銅は矢張り奈良朝が絶頂でありまして、平安朝には中絶して居ります。鎌倉時代に至りまして再び其使用術が復興して居りますが、遺品の状態から察しますと、關西の方よりは却て關東の方に多く銅の製作物は遣つて居ります。幸に關東に於て保存されたる銅像は多く造像銘を有つて居りますから、洵に年代が明瞭で今日大事な參考になります。

それから鐵であります。鐵佛は古い時代にはありせせぬ。朝鮮では古い時代にあつたことを一つ見ましたけれども、日本では殆ど鐵佛の存在が分つて居りませぬ。併し鎌倉時代になりましたは大に鐵の使用の途が開けてまして、現に刀劍の鍛鍊術なるものが鎌倉で鍊磨されたと同じに、非常に鐵の使用の途が開けて居ります。是れも關西の方で西大寺の興正菩薩などが鐵を使用した例がありますけれども、佛像としては却て關東の方にいろいろな種類が遣つて居ります。其最も大なる佛は今の武藏の府中の寺に遣つて居ります。

次には所謂夾紵キョウヂョです。漆を塗固めて造つた佛でありますが、是れには麻を使つたのと紙を使つたのと二種類あります。麻を使つたのは最も普通でありまして矢張り奈良朝を絶頂と致しますが、紙で拵へたのは僅に奈良の唐招提寺に鑑真和尚の像が一體あるだけであります。是れも其後は餘り行はれませぬで、殆ど日本では中絶したかの姿になつて居ります。

其次は木材であります。木材は實に日本の彫刻の生命とも稱すべき大切な材料でありまして、すべての時代を通じて使用されて居ります。隨て今日の佛教藝術は殆ど皆木材で以て出来て居ると云ふほか言ふことが出来ないやうな有様であります。併し一概に木材と申しました名香木でありまして、最も梅檀を貴んで居りません。即ち白檀と赤梅檀との二種類があります。併し之れを使つたものは材料の貴重なる故でありますか、大なる像がありません。みな小さい。さうして之を寺の古い財産目録に照らして見ますと、多くの木像に對しては何とも斷りませぬけれども、赤梅檀若くは白檀に對しては特に檀と云ふことを斷つて其材料の貴重なる所以を示して居ります。それから斯かる名木に對しては是れに漆を着せ若くは彩色を施すことをしないで、素地^{キダ}其儘を保存して、みな素目のまゝになつて遺つて居ります。併し斯かる材料は到底日本に於て得られるものでなく、皆支那より舶載したものでありますからして誠に其使用の途が少い、遺つ居てるものも亦少いのであります。使用の途が廣く一般に使用されたものと云ふことは出来ませぬ。次には斯かる檀木に代用された木材であります。檀木の代りに使用された木材としては桂だの楠だのと云ふものが遺つて居ります。此等は其材質がみな鞏固であつて目がつんで居るから多く使用されるのであります。併し此等に對しては檀像の場合とは違ひまして、或は是れに漆を施して箔を着せるとか、或は是れに彩色を施すと云ふやうなことになつて居ります。即ち如來或は主なる菩薩に對して

は多く漆を塗つて箔を貼つて居ります。菩薩以下の聖天など、いふ位の卑い佛に對しては多く彩色の法を取つて居ります。併し此等の材料を使つたときの彫刻は一體に丸彫丸彫の時代であります。丸彫とは即ち一木其儘を刻み込んで形に造る次第でありまして、重量も重く、持扱ひも不便で、且つ線の彫口が極く淺い、規則立つた線を彫るより外に使へなかつたものであります。是れは孰れかと申すと、彫刻の材料としては刀を思ふが如くに用ひて彫崩するには適當なるものではなかつたのであります。

然らば何が最も主なる材料であつたかと云へば則ち檜の材であります。日本が檜を有して居つたことが日本の木造建築に對してどれほど幸にしたか知れぬと同じに、佛教彫刻に對しても非常なる幸福を與へて居るのであります。即ち現今遺存して居る建築物中最も古きものと稱せらるゝ法隆寺の中門の如きも全く是れ檜材を以て造られて居ります。それから先年法隆寺で澤山上げました所の百萬塔であります。あの百萬塔の屋根の重なつて居る部分は檜材で造つてあります。それから挿込む處が出来て居りますが、あれは木材で出来て居ります。なせかと申しますと、あれは挽物の細工でありまして、屋根のやうな粗粗い部分をこなしつけるには檜の方が都合が好いが、九輪の様な細かい部分には檜材では軟が過ぎるから、もう一步堅い木材を使つたのであります。之れを以て觀ても、如何に材料を自分の使用せんとする目的に對して擇んで都合の好いやうに便宜を圖つたかと云ふことが分かります。

檜材が使用さるゝことになりましてから彫刻が何う云ふ風に發展したかと申しますと、第一は從來一

木造りの彫刻であつたものよりは、もう一層軽く、取扱ひ易く造らうと仕掛かつたのであります。是れは確に檜材の性質其ものがさう云ふことに適して居るからでありますが、即ち内刳の法であります。今まで丸彫で内部まで充實して居る材料を使つた代りに、内部を刳抜いて空洞に造る方法を始めたのであります。又それと共に斯う云ふことを始めました。既に一木の材料使用のときも、座像の如きに對して一つの全木を使ふと云ふことは容易でありませぬから、胴は胴の材、膝は膝の材、手は手の材と云ふ風に、材料を集めて一つのものが出来て居りますが、内刳の法を用ひるやうになりましたからは、もう一步澤山の材料を集めて其れを以て組立てることになりました。是れか彫刻で謂ふ所の寄木の法であります。即ち或ものは胴が前と背後に分かれ、或ものは顔が半分づゝ左右に分かれる。さういふ風に零細な材料を集めて内面を刳取つて薄くして結合はして安置すると云ふやうなことを始めたのであります。下度此點から申しますといふと、一方は布を漆で固めて内部を空洞にした様な形を取り、又一方には無論一木造りと似た仕方を取つて居る。いろ／＼古來行はれて居つた所の凡ての材料を使用する長處を完成して之れを檜材の上に應用したものと見て宜からうと思ふのであります。

木材の使用殊に檜材の使用と云ふことは日本彫刻の特質と言つて宜からうと思ふのであります。先程も申しました通りに、印度には決して多くの木造彫刻が遺つて居りませぬし、支那にもありません。また朝鮮にもありません。唯、日本に遺存せられて居ると云ふことだけを以て觀まして、其分量だけを以

としても既に是れが日本の最も得意とされた彫刻だと申すことも出来するし、又其技倆の複雑なる點から觀ましても、是れが木材を使用し盡した結果是れ丈に熟練したものと觀ることも出来るだらうと思ひます。それでありますから日本の佛教彫刻の特質は材料が木であることである。縦し一步二歩退きまして、印度支那朝鮮などにさう云ふものがあつたとし、又栴檀とか桂とか或は楠の如きも一つの木像彫刻であつたとしまして、此等は皆外國の影響を受けて造られたものでありますけれども、檜材の内列なり寄木を以て造られたものは是れは決して外國の影響を受けたものではありませんせぬで、日本で特別に養成し來つた貴重すべき佛教彫刻であらうと思ふのであります。

なせ是れが佛教彫刻として貴重であるかと申しますと、爰にいろ／＼なことをお話しなければなりませんぬが、今日日本の木像彫刻の最も優れて居ることを説きます前に、一つ印度あたりの彫刻の或方法と日本の木像との關係をお話して見やうと思ひます。

此處に瓜哇の佛があります。(寫真供覽)。此佛は腰に衣を着けて居りますが、菱形の模様が一面に縫つてあります。尙ほ近頃和蘭人の出版しました書物の中にも七寶つなぎと云ふのがあります。よく云ふ寶蓋しの模様の如きものです。それは裝飾と申しますけれども、或る一つのものが附いて居る形ではありませぬで、全く模様を立派にしたものと見なければならぬと思ひます。さういふ仕方は、少しく物は違ひますけれども。日本でも特に後の西域サイキヤの傳燈デンショウと稱せられて居る所の毘沙門ビシャモンに遺つて居ります。毘沙門

の鎖は畫いたものではありませぬで、所謂毘沙門龜甲キツカウなる模様は木を以て彫出してあります。さういふに本當に鎖を以てつながつて居る様子でも、日本の一般の彫刻から見れば彫出さなかつたのであります。即ち鎧の小札なるものは泊を置いて模様を畫いて拵へ居つたものを表はしたもので、其處まで手を下して居りませぬ。極く大體の形に重きを置いて細かい處に手を下して居りませぬ。然るに印度の分は純粹なる模様に對してさう云ふ細微の彫刻を施して居ります。この七寶模様と云ふものは實に佛教藝術の裝飾には大事なものでありまして、藤原時代の第一の名品と稱せられて居る高野山の二十五菩薩の像の中尊の阿彌陀の衣は全く其で寶模様で出来て居ります。獨り其像のみならず、藤原時代に於てあの厚い金箔を細く切つて裝飾にする術即ち截金を貼る術を應用して造つたものは此七寶と云ふものが盛に行はれて居ります。日本では其れ程に一方では七寶模様を普通に使つて居りながら、之れを彫刻の上に施すに於ては、決して彫出す位な手間をやつて居りませぬで、全然繁簡宜しきを得ると云ふやうに、不必要な處を除くと云ふやうな方法を取つて居ります。唯、一つ斯う云ふ例があります。それは筑前の宗像神社に石の狛犬がありまして、建久元年といふ札を懸けてありますが、其狛犬の臺座だけには七寶を彫出して居ります。是れだけは實に異例であります。さう云ふ風な始末の模様でありますが、日本では決して木彫に對してもさういふ細微な處に力を盡すことはせないと云ふ一例をお話したのであります。

先づさう云ふ遣方がありますが、其材料の上より見ますといふと、石に於て現はすことの出来るもの

は殆ど木に於て現はし得ないものはありませぬ。それから金屬に於て現はれる金色と云ふものも、箔さへ使用すれば木材の上で何時でも金の變形を造ることが出來ます。それは石にもいかす銅にもいかす塑像と木彫のみが特長であつて、彩色する方は是れは木彫が一番適當して居ります。日本で木彫が盛になつて來た時代即ち藤原時代に於ては、銅に代用して金箔を漆で貼付けることも盛にやれば、又塑像や其他にやつて居つた所の彩色法も盛にやつて居ります。殊に彩色法は最も木彫の長處でありまして、日本の藤原時代の彩色法を最も能く活かしたのであります。(寫眞供覽)。斯う云ふ風な綺麗な彩色を施して居ります。斯う云ふことは他の材料を使つては決して出來ない。繪畫より外には唯、木像に於てやつて行けるのみである。塑像でもやつて居りますけれども塑像よりはもう一步綺麗な彩色が上がつて居ります。さうして外の材料の代用として使はれて殊に彩色の最も綺麗な處を發揮することが出來るといふ長處がある外に、之れを組立てる上より考へて見ますと、到底銅も石も學ぶことの出來ない複雑なる組立法をやるのであります。それは段々發達して來て居りますけれども、其組立法の一番複雑なのは此阿彌陀さんの臺座になつて居る總ての部分の組合せ法であります。吾々は何うしても平等院の阿彌陀が最も大成した時期であるだらうと思ふ。之れを詳しくお話し申すと餘程面倒でありますから大體だけをお話致しますが、阿彌陀の臺座の蓮華は全彫で造つた時代もありますけれども、是れはさう云ふものであります。蓮の蓋になる部分の一つの摺鉢形を造つて、其の周圍に一辨々々を葺き重ねたもので、恰も蓮華が

開いた様な感じがするのであります。この葺蓮華の座を造ることは何處の國にも見ることが出来ない。石材を以て花瓣形のもの何枚も造り之れを組合はせて臺座を造ると云ふことは到底思ひもよらない處であります。又金屬で以て一枚々々の瓣を造つてそれを綴付けて臺座と致しましても、軽い感じは到底木彫に及ぶものではありません。此お話をすると大分長くなるから省いて置きますが、鳳凰堂あたりの阿彌陀の臺座の様式を石造でやつて居る制度は朝鮮などに於ても之れを見ることが出来ます。印度のでも、支那のでも、朝鮮のでも、石材を使用して居るものは、上の蓮華であるとか、八角六角の束がありますが、其位のものしか出来て居りませぬ。併し木彫にある臺座はさう云ふ簡單なもので殆ど九重、十一重と云ふやうな澤山のを組立て、居ります。此臺座の組立法、それから今申した鳳凰堂で御覽になりましたでせうが後背の透し彫の法、是れも印度あたりでも透し彫の法を取つて居りますけれども、木材でやる透し彫の法はさういふものでありませぬで、澤山の小さい木を繼ぎ合はせては彫透かして一つの板に纏めたものであります。さうでありますから極く軽くして軟かな感じが出て來るのであります。後世其木造の代りに銅を用ひますけれども到底木造には妙味が及びませぬ。(寫眞供覽)

印度や支那に於て瓣なら瓣の局部に互つて彫刻して居りますが、さう云ふことは無論木彫では何時でも出来る。日本に遺つて居るものには斯くまで精巧なる彫刻を施して居りますから、いざ刻むとなれば凡その材料に對して何物も木彫の上に出ることは出来ないであらうと思ひます。それで斯くまでも軟かな

ものを何枚も重ねて蓮華を造つたり、又薄き板を重ねたり、いろ／＼複雑な臺座をして居りまして、其上に丈六位な佛像が載つて居つて、中心がさして狂はず、又臺座が潰れもしないのは何に因るか云ふと上に載つて居る本尊が内部を刳抜いてあるから極く軽いからであります。又さう云ふ複雑なる臺を以てしても能く之れを支へて永い間其位置を保つて行くことが出来るのであります。それで總てを綜合して見ますと木彫の最も發達した時代のものを能く利用し其長處を使ひ盡して居ると云はなければならぬのであります。恐らくは世界何れの國に行きましても木材を斯くまでに使ひ盡した國はなからうと思ひます。

さう云ふ風な鳳凰堂式のを普通吾々は日本彫刻の大成したものと云つて居ります。即ち是れ迄は外國の臭味を幾らか帯びて居つたけれども、さう云ふ臭味を全然脱してしまつて純日本式に化した時代の彫刻であると云つて居ります。さうして之れを宗教の上から考へて見ますといふと、此時には日本の宗教と云ふものが成りかけて居る時である、即ち淨土の極樂思想と云ふものが佛教の信仰の中心となつて居つた時代であると吾々は言ひたいのであります。この淨土の思想だの極樂の繪だのと云ふものは此時代以前にも遺つて居ります。寺々の古い記録を見ますと或ものは刺繡的にやつたものもあるし又畫いたものもありますけれども、いろ／＼極樂淨土は遺つて居ります。併し其極樂淨土が藤原時代に生じて來た極樂淨土ほど強い感じを有つて居なかつたと同じに、それを現はした所の姿も此時代とは餘程違つて來て居る。それで此極樂思想を充分に現はし出して、殊に本尊たるものを造つて是れが極樂淨土の本

尊であると云ふことを現はすには何う云ふことが必要であつたかと申しますと、それには佛像を出来るだけ莊嚴に裝飾する必要があつたのであります。乃ち本尊の阿彌陀なら阿彌陀なるものゝ其處に居らるゝ姿が淨土を支配して居るかの如き感じの映るものでなければならなかつたのであります。然るに其頃使ひ來つた淨土の圖様といふものを見ますと、阿彌陀と云ふものは非常に複雑なる臺座の上に座つて餘程立派に見えるものでなければならなかつた。繪に現はしたる複雑なる淨土思想と云ふものを彫刻に於て現はさうとしたならば鳳凰堂の阿彌陀の形式を取るより外仕方がない。即ち九重或は十一重と云ふやうな澤山の材料を疊み重ねて、各部々に違つた裝飾及び形を取り、乃ち初めて全體が一つに纏まつて莊嚴な考が出ると云ふことが必要であつた。斯かる一方の宗教思想に於ける淨土の阿彌陀、其阿彌陀が極樂の主人公であると云ふことを偲ぶには鳳凰堂のやうな形式が必要であつて、更に其形式を出すには木彫を以て當つた方が最も能く之れを完成することが出来たのであります。それであるから日本の宗教が日本化すると云ふことは獨り宗教思想のみならずして、其信仰の對象として現はれるものまでも之れを同化することが出来た。同化することを得たのは即ち木彫の爲めである。

斯う云ふ風な一方に靜的彫刻を木彫に於て仕上げたのみならず、其次になりまして忿怒が起りまして忿怒勇猛の相を現はす佛像の必要の起つたときに、之れを満足せしむるものが亦木彫でありました。四天王などの忿怒の勢ひの烈い様を現はすには銅を以てすることは出来ませぬ。石を以てすることは尙ほ

難い。鐵を以てするかと云ふと、鐵を以てすることは尙ほ難い。獨り木彫のみが之れを能くすることが出来た。即ち有名なる運慶、それから運慶の父の康慶、それから其弟子であつた所の快慶などは、皆前の時代とは變はつて、此新き時代に於て餘程形式の變化の限りを木彫に於て現はすことをやつて成功した所の人々であります。さう云ふ人々があつた爲めに鎌倉彫刻と云ふものが出来て、此鎌倉彫刻の動的彫刻と云ふものが木彫に依つて出来たのであります。斯う云ふ風に日本の佛教彫刻の靜的方面動的方面兩方共に木彫を以て作られて、それが純日本趣味を代表したもので他國に見ることが出来なかつたものであります。

是れに由つて一つ斯う云ふことを考へて見たいのです。一體先程から佛教藝術の行はれて居る所の國々の像を見ましたが、みな銅であるとか石であるとか云つて、天災及び人爲の變災に對して十分に抵抗力のあるものばかりが遺つて居るのであります。どちらと申しますと、木材はさう云ふことに對しては甚だ力が弱いのであります、併し、向ふでも非常に澤山造つたでせう。是れは國の大、寺の數の多いこと、總てを以てしたならば、印度や支那は到底日本の比ではありませぬ。併しながら日本では其の最も天然の抵抗力の薄弱なるものが非常に澤山古くから保存されて來て居ります。私は支那の寺の内部は見ませぬから知りませぬけれども、伊藤君あたりのお話を聽きますと、何も持つてゐないと言つて居ります。朝鮮の寺は私は實際調べて見たから知つて居りますが、是れも何も持つて居りませぬ。唯、佛壇に

は花活香爐が一つあるだけで、其外何等の装嚴もしてない。さう云ふ簡單なる状態であります。日本の寺は何うかと言ひますと、まるで無住の寺ならいざ知らず——無住の寺でも相當に裝飾をして居りますが、多くのものは皆いろ／＼なものを備へて、壇上の莊嚴は兎も角も、藏には佛なり何なり澤山に保存して居ります。そこで獨り彫刻に付て言ふのはありませぬが、どうも保存と云ふことが日本人の特性ではあるまいかと云ふことを考へたのであります。何處の國の人でも物を保存して大事に持傳へて行くと云ふことは、多少はありませうけれども、日本人の如く大事にする人種はないであらう。勿論支那には古くより朝廷で以て天下の書畫骨董の類を蒐集し、後に個人でも之れを蒐める者があつて、其所藏品を目録に著はしたものがいろ／＼ありますけれども、併し之れを向ふの土地の大と比較して見ますと、日本の方が遙かに其點に於て廣いです。日本人の保存力と云ふものは非常に貴重なるものでありまして先程のお話でも分りますけれども、日本の皇室とか國家に對する考の中には保存と云ふことが含まれて居るかの如くに、僅かな一物一品たりとも之れを保存し來ると云ふことは矢張り同じ所から翦して來るのではなからうかと思ふのであります。

拜啓暑氣御障も無之候や御伺申上候……先日露國のウイツテ氏
ペルリンより當地に來り……日本及支那の事を講演し日本に關す
る多くの著書及繪ハガキを數多持ち來り聽衆に示し候然るに該繪ハ
ガキは何れも我國の片田舎に於てのみ見る可き風俗を寫したるもの
に候ところが滑稽にも之を東京の風俗と心得て小生に質問する者多
々有之辯明に骨が折れ申し候其一例として此子守の日本繪ハガキを
御送申上候。

大正三年七月六日

文學士 補永茂助